

国民 (nation) と人種・民族 (race or tribe) の問題

～ 解説『ヴェニス商人』、『オセロー』、『ユリシーズ』～

梅光学院大学名誉教授 吉津成久

1. 『ユリシーズ』～ 名前＝実体か？ (“Nameless” 対 “Noman”)

ウィリアム・シェイクスピアの名作『ロミオとジュリエット』の有名なバルコニー・シーンで、ジュリエットが、意中の人であるが敵同士の家の人であるロミオに向かって “What’s in a name?” (名前に何の意味があるの?) と切り出し、「名を捨てて貴方の中身をください」と言うところがある。一方、アイルランドが生んだ20世紀最大の作家ジェームズ・ジョイスの代表作『ユリシーズ』で、1904年6月16日木曜日の今日、たがいに魂の父と子を探し求める大学生スティーヴン・ディーダラスと38歳のハンガリー系ユダヤ人で新聞広告業のレオポルド・ブルームは、ダブリン市内を放浪の末夜遅くやっと出会う。その時、スティーヴンがブルームに向かって次のように切り出して二人は対話をはじめめる。

「音の響きというものは詐欺師ですよ。」と暫く口をつぐんでいたスティーヴンが言った。「名前と同じです。シェイクスピアだってマーフィと同じ平凡な名前でした。名前なんぞになんの意味があります？ (What’s in a name?)」 「そうだね、確かに。」 ミスター・ブルームは心から賛意を表した。「もちろんそうだ。ぼくの家だって実は姓が変わったことがあるよ。」

ブルームとスティーヴンにとって「名前」は親からあたえられたもので、自己の本質(実体)をあらわすものではない。ジュリエットがロミオに「名を捨てて貴方の中身をください。」と求めるように、大切なのはその人の「本質」、「実体」、「魂」であり、この領域まで他者に制圧されることを二人は極力避け、自分のアイデンティティを他者に対してあいまいにしておくことが、漂泊の旅人であるブルームとスティーヴンの生きてゆく戦術なのである。

ジョイスが当時偏狭なナショナリズムが渦巻く西の辺境アイルランドの首都ダブリンを脱出して、世界の文化の華パリへ文学修業のため「自発的亡命」を試みたのは1902年、20歳の時であった。その若き日のジョイスをモデルとするスティーヴン・ディーダラスは、時を2年後の1904年6月16日木曜日におく『ユリシーズ』において、母危篤の電報で呼び帰され、芸術創造の大志を挫かれ、母の死後は小遣稼ぎに私立学校で教師をしている。カトリック信仰を捨てた彼は、母臨終の床で、母の懇願にもかかわらず祈ってやらなかったことへの激しい罪悪感にさいなまれている。そして、まったくの俗人である父親と袂を分かち、弟妹が多く、その日の生活にも事欠く家庭を捨てて、友人の医学生マリガンやケルト民話収集に来ているイギリス人青年ヘインズと一緒に、イギリス国防省がナポレオン侵攻にそなえて建てた砲台付きのマーテロウ・タワーに家賃を払って住んでいる。しかし、彼はマリガンに金をまきあげられるし、タワーの鍵も要求されて渡してしまう。もはやタワーに戻るまいと決心し、家に帰ろうにも帰れないスティーヴンはダブリン市中を徘徊する。一方レオポルド・ブルームは、歌手である妻モリーとの間に11年前長男ルーディをもうけたが、その子は生後11日目に死んだ。それ以来、二人の夫婦関係は途絶え、妻は次々に恋人をつくっていき、今日は25人目の恋人である興業主ブレイゼズ・ボイルンと自分が留守の我が家で不倫を犯すことを知っているが、それを咎める勇

気がない。彼の時計は、妻が姦通した午後4時30分で止まってしまふ。ブルームは、今朝友人ディグナムの埋葬に出席するために喪服に着替えた際、鍵を喪服のズボンに入れることを忘れて外出してしまった。すなわち、スティーヴンもブルームも「鍵なし人間」であり、物理的にも人間的にも二人はホームレスであり、帰りたくないし、帰れないのである。彼らは、ホームはありながらホームレスというまさに現代無縁社会と同じような状況に置かれている。そして、二人はそれぞれ実の父と死んだ息子の代わりとなる魂の父と子を求めており、しかもアイルランド人とユダヤ人であり、いずれも他国人に領有権を篡奪され、迫害され、裏切られ、諸国を漂泊してきた「流離いの民」の子孫である。

ギリシャのホメロスが書いた古典『オデュッセイ』の主人公オデュッセウス（ユリシーズはその英語名）をモデルにしたのが『ユリシーズ』におけるブルームである。ギリシャの英雄オデュッセウスは、片目の巨人キュクロペスに名前を聞かれて、“Noman is my name.”と答えて危機を脱する。一方、非英雄的であるが、現代のオデュッセウスに擬せられているブルームは、国粋主義うずまくダブリンにあって、酒場を牛耳る「市民」(the Citizen) というあだ名で呼ばれる男や「名前のない男」(Nameless One) によって名前を通して実体を暴かれようとするが、「誰でもいい人間にして誰でもない人間」(Everyman or Noman) の資質を賦与されているブルームは、その難を逃れ、彼らに正体をつかませない。ある時は「フリーメイスン」(欧米を中心に世界中に組織を持つ慈善・親睦団体) であつたり、またある時は「シンフェイン党员」(イギリスからの完全独立を目指すアイルランドの政治結社) であつたり、とうとう「あの男はユダヤ人なのかい、非ユダヤ人なのかい、神聖ローマカトリック教徒なのかい、メソジストなのかい、そもそもいったい何なんだい？」となる。ブルームは、ユダヤ人の父とアイルランド人の母との間に一人息子として生まれたが、割礼を受けていない。父が改宗したのでプロテスタントの洗礼を受け、さらにモリーと結婚するに先立ってカトリックの洗礼を受けた。だが聖体拝領を受けていないので正式のカトリック教徒とはいえない。このように、ブルームはどこにも帰属する社会のない幽霊のような存在であり、スティーヴンに「あらゆる偉人のなかでもっとも謎めいており、生きて悩んだという以外は黒い影におおわれている」と言わしめたシェイクスピアに相通ずる存在といえる。

ブルームは、突然夫を失った未亡人や気の狂った夫を持つ婦人や難産で苦しむ女性に同情し、救いの手を差し伸べようとする。1904年6月16日の今日、ダブリン市内を徘徊する彼の大きな目的の一つは、本業である新聞の広告取りをしてまわるかたわら、こうした弱い立場の女性を助け、慰問することである。例えば、故ディグナムの未亡人が遺児5人をかかえて難儀していることを知ると、政府に顔の利く知人を介して夫が借金のため担保にしていた保険金が未亡人に下りるよう奔走する。第12挿話で、ブルームはこの知人と会うため、約束の場所「キアナンの酒場」へ赴く。知人はまだ来ておらず、彼は酒場の常連たちの輪の中に加えられるが、酒は飲まない。彼は「市民」(The Citizen) という綽名の熱烈なナショナリストの機嫌を損ねてからまれる。この男は反英国主義と外国人特にユダヤ人嫌いで有名である。二人の問答はこんな具合だ。

- ところでお前さんの国 (nation) はどこなんだい？
- アイルランドですよ、わたしはここアイルランドで生まれました。(市民が咽喉から痰を吐き出す。) だけど僕は、一方では、忌み嫌われ迫害されている民族 (race) に属しています。(市民がゲップを出す。) 盗み取られ、強奪され、侮辱され、迫害されているのです。
- 新しいエルサレムの話でもしているのかい？
- 不正のことを言ってるんです。
- なら、男らしく力で対抗しろよ。
- いや、そんなもの何の役にも立ちません。本当に大事なものはそれと反対のものです。
- つまり何だね？

— 愛です。憎しみの反対です。 (下線は筆者による)

nation と race は類語であるが、nation は、主権国家に属する国民の総体で、言語、慣習、法律、制度などの文化的要素を共有する集団を指し、race は、人類学的、民族学的意味合いの強い人類の分類である。アイルランド人にしてユダヤ人(民族)であるブルームと同様な苦悩を味わう民族が今も跡を絶たない。

ここに登場する「市民」や「名前のない男」は、「名前=実体」であると考え、彼ら自身の名前を隠して“nameless”にすることによってその正体を他者から隠し、一方、他者の名前を支配することで、それが指示している実体をも支配した気分ひたっている。この第12挿話の「市民」や「名前のない男」、すなわち“nameless”な者たちと“Noman”たるブルームとの間には、名前を通して実体を支配できると信じ、自らの名前を隠しながら他を支配しようとする者たちと、名前はあってもその実体がなかなか捉えきれない者との闘いなのである。

さらに、「市民」は、ブルームを二つの社会的秩序の観点から定義しようとする。すなわち、アイルランド国民ではあるが、ユダヤ民族であるという国家秩序の観点と「神に呪われた男」というキリスト教秩序の観点である。ブルームが批判し続けるのはこの二つの秩序による専制支配の在り方であり、名前の問題もこの二つの秩序による支配を免れることができない。『ユリシーズ』のもう一人の主人公であるスティーヴン・ディーダラスも、この二つの秩序による専制支配に対して異を唱える。それは、ケルト民族を祖とする祖国アイルランドがアングロサクソン民族である隣国イギリスに800年にわたり屈辱的な支配を受けてきたことについてである。その支配を受けるきっかけになったのは、1166年、時のアイルランド王ダーモット・マクマローがわが身の危険から時のイギリス王ヘンリー2世の援助を求めたことである。まず、ヘンリー王の部下で「ストロングボウ(強弓)」の異名を持つ武将がマクマローの長女オイフェ(またはイーファ、Aoiffe)との結婚と王位継承権付与を条件にアイルランドに乗り込み、これを征服、のちのヘンリー2世による屈辱的支配への道を開いた。現在ダブリンの国立絵画館に陳列されている「ストロングボウに略奪されたアイルランドの娘オイフェ(イーファ)の図」は、アイルランドそのものの敗北をあらわすものである。一方、その昔、アイルランドの先祖ケルト民族の神話の英雄ク・フーリンの子を産んだ同名の女オイフェ(イーファ)は、「黄泉(よみ)の国」(The Land of Shadows という異界)の誇り高き王女で魔術に長けていた。『ユリシーズ』の冒頭の場面で、スティーヴン・ディーダラスは、マーテロウ・タワーに牛乳を運んでくる老婆を「母」なるアイルランドになぞらえる。「牧場の女王(Silk of the Kine, アイルランドの古称)にして貧しい老婆(poor old woman, アイルランドの古称)。それは昔彼女に贈られた名前。さまよい歩く老婆。不滅なる存在が卑しい姿に身をやつして、おのれの征服者(イギリス人)とやくざな裏切者(アイルランド人)とに仕えている。どちらからもなぶられている娼婦。」(マーテロウ・タワーにスティーヴンと同居するケルト民話収集に来ているイギリス人ヘインズとスティーヴンの友人で医学生のマリガンを暗示しながら、二人が代表するイギリス人とアイルランド人を指す。)

2. 『ヴェニス商人』～二つの社会的秩序(キリスト教とユダヤ教)の対立

この劇は、最初 Stationers' Register (出版登録)に“a book of the Merchant of Venyce or otherwise called the Jewe of Venyce”と記入された。つまり、作者シェイクスピアは、この劇をアントウニオウ、すなわち the Merchant of Venyce の名をもって代表させようか、それともシャイロック、すなわち the Jewe of Venyce の名をもって代表させようかと迷ったことを示している。結局、アントウニオウ、すなわち the Merchant of Venyce の名で呼ぶようにしたのは、アントウニオウは目立たず、シャイロックに比べ性格が非常に弱い、いいかえれば、あまりに寛大で親切すぎる性格であるが、この劇の話が成立してゆく重要な出来事

を導いた人間という意味では主人公といえなくはない。すなわち、アントウ二オウがバサー二オウに金を工面しなかったら証文の話は起こらなかったであろうと考えられる。しかし、シャイロックが主人公ではないとはいえない。出版登録によるタイトルは、「ヴェニス商人は、ヴェニスのユダヤ人という含みもある」ことを示している。ところで、この劇の題が **The Merchant of Venyce** であって、個人の名前であるアントウ二オウではないこと、そして、シェイクスピアの頭の中にあつたもう一つの対極は **The Jew of Venyce** であって、シャイロックという個人名ではない、ということは重要な点である。この劇では、二つの相対立するが、ヴェニスにあつて共存してゆく宿命を担っている社会的秩序がある。その一方は、アントウ二オウによって代表される「ヴェニス商人」、つまりキリスト教的な社会秩序であり、もう一方は、シャイロックによって代表される「ヴェニスにおけるユダヤ商人」、つまりユダヤ教的な社会秩序である。そして、アントウ二オウはヴェニスという国家（ヴェネツィアという共和国家、ヴェニスはその英語名）の国民であり、シャイロックは外国人でユダヤ国民。当然両者の民族は異なる。

アントウ二オウが属するキリスト教社会は利子を取らない。つまり、バサー二オウとの間に示されるような友情が支配する社会で、それはキリスト教社会の理想とする兄弟盟約的共同体社会であり、その社会は、それと反対の、利子を取る、つまり友情のない社会としてのユダヤ社会を激しい敵意を持って周辺部へ押し出し、隔離し、被差別の対象とすることによって、アイデンティティを誇示しようとする。一方シャイロックは、ユダヤ人としての社会的秩序に忠実に生きる人間であり、キリスト教徒との違いを常に意識している。彼は、アントウ二オウの顔を見るや否やいきなり次のように言う。

How like a fawning publican he looks !	なんだ、あいつ、まるで神様にごますった収税吏の面だ！
I hate him for he is a Christian,	おれはあいつが大嫌いだ、キリスト教徒だからな。
But more for that in low simplicity	だがそれより気に食わんのは謙虚ぶって馬鹿面さげ、
He lends out money gratis and brings down	ただで人に金を貸しやがって
The rate of usance here with us in Venice.	ヴェニスのおれたちの仲間の金利を引き下げていることだ。
If I can catch him once upon the hip,	なあに、一度あいつの弱みを握ったらこっちのもの、
I will feed fat the ancient grudge I bear him.	積る恨みをゲップが出るほどはらしてやるからな。
He hates our sacred <u>nation</u> , and he rails,	あいつは俺たち神に選ばれた <u>ユダヤ人</u> を憎んでいる、そして、
Even there where merchants most do congregate,	商人たちが大勢集まっているところでも、
On me, my bargains and my well-won thrift,	俺を、俺の商売を、それに俺の正当な稼ぎを
Which he calls interest. Cursed be my <u>tribe</u> ,	高利貸しとぬかして悪態をつく。そのあいつを
If I forgive him ! (I, iii, 42-53)	俺が黙って許すなら、わが <u>民族</u> は地獄落ちだ！

(下線は筆者による)

2幕5場51－57行で、シャイロックはバサー二オウに招かれて晩さん会に出かけるが、娘ジェシカに後をよろしく頼むと注意し、何となく虫の知らせか、後ろ髪を引かれる思いで出かけてゆく。

<i>Shy</i>Well, Jessica, go in:	シャイロック :さ、ジェシカ、お入り。
Perhaps I will return immediately:	おれは、多分、じきに戻ってくるだろう
Do as I bid you; shut doors after you:	言いつけたとうりにしなよ。入ってから、どの戸口もよく閉めなよ。
Fast bind, fast find;	締まりが堅ければ失うことなし。
A proverb never stale in thrifty mind. [Exit.	経済家に取っちゃ今でも意味の深い諺だ。(退場)

Jes. Farewell; and if my fortune be not crost, ジェシカ：さようなら。思い通りに事が運べば、
I have a father, you a daughter, lost. わたしはお父さんを失くすし、お父さんは娘を失くすんだわ。

シャイロックは、”Fast bind, fast find”（「締まり屋の溜まり屋」、「しっかり締めれば、しっかり占める」とか、「締まりが堅けりゃ失せものなし」等のように訳されている）という諺を持ち出して、戸締りをしっかりするよう娘のジェシカに命じて出かけるが、そのすきに、娘はロレンゾウというキリスト教徒の男と駆け落ちしてしまう。したがって、この諺はまことに皮肉な結果となる。この ‘bind’ は勿論ここでは「締める」という意味であるが、この一語自体には「きずなで結ぶ」という意味もある。ジェシカの駆け落ちは、シャイロックにとっては、自分が大切にしている社会的秩序そのものに等しい親子のきずなを切られたということになる。娘はキリスト教徒として駆け落ちしたばかりでなく、金や宝まで持ち逃げしてしまった。シャイロックにとっては、先ほど述べたように、金は唯一の商品であって、キリスト教徒の敵意と憎悪の中でユダヤ人として生きてゆくための手段である。だから、娘と金を同列に置いたり、ましてや、娘が死んで足元に横たわっていても、彼女が持って逃げた宝石と金を取り返されたほうが良いと断言するあたりは、道徳的価値判断の立場から言えば、非難すべきことかもしれない。しかし、そのような価値判断は関係ないのであって、シャイロックにしてみれば、娘も金も両方とも、自分が所属し、そこに生きる社会的秩序を表していたということである。そして、彼のあの非難を招くような言葉は、宝を失ったことに対する怒りのために誇張された言葉であるかもしれない。少なくとも、彼が亡き妻の形見を非常に愛するところから見れば、彼が人情味がないと断言することはできないからである。彼がもしユダヤ人ではなく、もっとよい、迫害されない境遇に置かれていたら、彼の性格はひがむことなく、素直に伸びていただろう。そうした折も折、アントウ二オウの船が難破して3000ダカットの借金返済が不可能となり、例の証文の条項（肉1ポンド）が現実化する。つまり、一度は崩壊した自分の社会的秩序が回復される絶好の機会をシャイロックはつかむのである。

サラリーノとの対話の中で、シャイロックは、「ユダヤ人だってキリスト教徒と同じ人間ではないか？」という有名な台詞を吐く。この時、我々は、彼がユダヤ人として生まれなかったら、という同情の涙を禁じ得ない。それは、彼が最後に何もかも失い、キリスト教への改宗を宣言されて法廷を出てゆくとき、その後ろ姿に我々が一滴の涙を惜しまないのと同じであり、作者シェイクスピアも恐らく涙をもってその後ろ姿を見送ったであろう。3幕1場49－76行のシャイロックがサラリーノに言った言葉をここに抜粋する。

.....let him (Antonio) look to his bond: あの証文を忘れるな。あいつ、俺のことをしょっちゅう高利
he was wont to call me usurer; let him look to his bond: 貸しだと悪口しおった。あの証文を忘れるな。
he was wont to lend money for a Christian courtesy; あいつめ、キリスト信者の仁義親切をいいたてに、いつ
let him look to his bond..... も（無利子で）金を貸しおった。あの証文を忘れるな。...
He (Antonio) hath disgraced me, and hindered me あいつ、俺に恥をかかせて、50万からの損をさせた。
half a million; laughed at my losses, mocked at my gains, scorned my nation, thwarted my bargains, 俺の国の者を蔑み、俺の商売を妨げ、
cooled my friends, heated mine enemies; and what's his reason? I am a Jew. Hath not a Jew eyes? 俺の友達へ水を差し、俺の敵をおだておった。何故
hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? fed with the same food, 俺の敵をか? 四肢五体は? 感覚や好き嫌いや情欲は? キリスト信者
hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and ユダヤ人に眼がないか? 手がないか? 鼻や耳や口がないかからんか? 同じ方法で治らんか? 同じ冬を寒がり、同

cooled by the same winter and summer, as a じ夏を暑がらんか？
 Christian is? If you prick us, do we not bleed? 俺だって、針で突かれりゃ血が出るわい。
 if you tickle us, do we not laugh? If you poison us, くすぐられりゃ笑わんでおられるか？毒を飲まされりゃ
 do we not die? and if you wrong us, shall we not 死ぬまいか？侮辱されりゃ、復讐しないでおれようか？
 revenge? If we are like you in the rest, we will 他のことがお前たちと同じなら、それもお前たちに似て
 resemble you in that. If a Jew wrong a Christian, いるはずだ。もしユダヤ人がキリスト教徒を侮辱したら、
 what is his humility? Revenge. If a Christian 仁愛を表看板にしている奴が何をするか？復讐だ。
 wrong a Jew, what should his sufferance be by なら、キリスト教徒がユダヤ人を侮辱したら、忍従が習わ
 Christian example? Why, revenge. The villany しのユダヤ人だって、その例からいや、当然復讐よ。非
 you teach me, I will execute, and it shall go hard 道はお前たちが教えたからするのだ。教えられた以上
 but I will better the instruction. のことをしなくってどうするものだ。

(下線は筆者による)

シャイロックは一喜一憂している。彼が嘆くのは、彼にとって何よりも重要なものである社会的秩序の崩壊であり、彼が喜ぶのは、その回復への期待である。ところで、3幕1場全体でもそうであるが、特に、この対話でのシャイロックの台詞は、言葉の繰り返しが多いという特徴を持っている。彼の喜びと悲しみの感情の高まりがこのような文体を生み出したといえるだろう。しかし、どうもそれだけではなく、別の効果のねらいが込められているように思われる。それは、今引用した台詞のはじめに繰り返される“let him look to his bond”（あの証文を忘れるな）という言葉で、49行から52行まで3回繰り返される。そして、それは、3幕3場、アントウニオウを前にしてシャイロックが繰り返す“I will have my bond.”（証文通りにしてもらうんだ）という言葉に収斂されていく。この3幕3場では、アントウニオウとのわずかに17行という短い対話の中で5回も繰り返される。これほど繰り返されているうちに、この言葉自体が、「証文通りにしてもらうんだ」という意味を超えて独り

歩きを始める。この言葉だけが我々の脳裏に妙に残る。まるで、彼の失われた社会的秩序＝絆 (bond) を回復しようという並々ならぬ決意であるかのように。

しかし、この回復への願望は、ついにシャイロックには許されない。先ほど引用した2幕5場の終わりで、シャイロックは“Fast bind, fast find”という諺をのこして家を去る。'bind' はもちろん 'bond' の動詞形で、娘と金という社会的秩序＝絆を何としてでも失いたくない必死の思いが伝わってくる。この言葉と“look to his bond”, および“I will have my bond”は呼応しあい、我々の脳裏に焼き付かれるのである。娘ジェシカは、父の諺引用の後、“Farewell; and if my fortune be not crost, I have a father, you a daughter, lost.”（思い通り事が運べば、わたしは父さんを失くしてしまい、父さんは娘を失くしてしまうんだわ）とつぶやいて、去っていく。父娘の今生の別れは短い言葉をもって終わるが、何か悲しく、重々しい。'fortune' は「幸運、運命」という意味と「財産」という意味がある。まさに、シャイロックという親のもとに娘として生まれた「運命」とシャイロックの「財産」というかけがえのない社会的秩序を支える支柱をシャイロックは取り去られてしまうのである。

3. 『オセロー』～ 個人名か□人種名か？ (オセローとムーア人)

『オセロー』という劇の完全なタイトルは、*The Tragedy of Othello, the Moor of Venice* である。つまり「オセロー」という個人名と、「ヴェニス人のムーア人」という異邦人の身分を示す名が併記されている。ムーア人とは、ヨーロッパで、マグリブ（北西アフリカ）地方のイスラム教徒の呼称である。オセローは、ヴェニスの元老院議員を父に持つデズディモウナを妻に娶り、キプロス島の占有権をめぐるトルコ軍との戦いでヴェニスを勝

利に導いた英雄として迎えられる間は、ヴェニスの最高権力者からも「オセロー」という名で呼ばれるが、デズディモウナの父ブラバンショーからは最後まで「ムーア」と呼ばれ、最終幕、妻を殺してからは、イアゴの妻エミリアに「野蛮で非道きわまるムーア」とののしられる。呼称の変化は、個人として認められるか、異邦人としての身分にわくずけされるかによる。

1幕2場、オセローがはじめて登場し、イアゴとの対話を交えて次のような台詞をいう。(18-32行)

Oth......My services which I have done the signiory オセロー：.....俺がこの国の政府に尽くした功績には、
Shall out-tongue his complaints. 'Tis yet to あつた男（ブラバンショー）の訴えも歯が立つまい。
Know, — それにまだ誰にも言ったことはないが—
Which, when I know that boasting is an honour, 名誉のためには時に大口もたたかねばならぬとならば、あえて
I shall promulgate — I fetch my life and being 言おう— 俺は人となり王族の出であり、功績の点からいって
From men of royal siege, and my demerits も、何の引け目もない。今こうして手に入れた幸運、誇らか
May speak unbonneted to as proud a fortune に要求する権利があるのだ。そうではないか、イアゴ、
As this that I have reach'd : for know, Iago, もしおれがデズディモウナを愛
But that I love the gentle Desdemona, していないなら、誰がこの流離いの自由な境遇を籠の中に閉じ
I would not my unhoused free condition 込めてしまおうものか、たとえ海の幸をことごとく引き換えに
Put into circumscription and confine くれると言われようとも。
For the sea's worth. But, look! what lights come yond? 待て、向こうから明かりが！

Iago. Those are the raised father and his friends: イアゴ：父親（ブラバンショー）と一味の者どもで
ご

You were best go in. ざいましょう。起こされたものと見えます。さ、早くお入りになったほうが。

Oth. Not I: I must be found: オセロー：いや、俺は隠れない、俺は見つけられなければならない。

My parts, my title and my perfect soul 俺の気質、夫としての立場、良心、いずれに賭けても、何一つ疚しい
Shall manifest me rightly. ことはない。

(下線は筆者による)

ここで目立つのは、それまで三人称代名詞である「奴」や「野郎」や、また「ムーアめ」と蔭で呼ばれていたオセローが、みずからの個人としての価値を主張する際に用いるおびただしい数の一人称代名詞(下線部)である。それは、15行の台詞の中に17回も使われる。それにブラバンショーとロデリーゴ(デズディモウナとの結婚願望者)が今ここにやってくるから「中に入ってお隠れなすったほうがいいでしょう」というイアゴの忠言に対し、オセローが「いや、俺は隠れない、おれは見つけられなければならない。」(I must be found)と主張するところは注目に値する。「体を見つけられなければならない」という表面上の意味だけでなく、自分をしばり

つけているムーア人としての絆、すなわちヴェニス社会の偏見をはねのけて、自分の内部に本来備わっている実体、個人としての価値を認めてもらわねばならない、というオセローの真意が伝わってくるようである。この主張に対して、『ヴェニスの商人』におけるシャイロックは、キリスト教徒と対極にあるユダヤ教徒としての絆、すなわち己の社会的秩序を失わないことによって唯一己の *raison d'être* (存在理由)を維持しようとするわけである。両者の 'find' 'found' はそのような対照的な意味合いを持っているのである。

イアゴは、オセローを「ジェラシー」(jealousy)という名の「緑眼の怪獣」の餌食にし、その怪獣の牙にさいなまれる地獄の苦しみに彼を陥れることを意図した。イアゴは、人が陰謀を企んでいる時、その陰謀の目標となっている人間の前でその陰謀の内容をことさら口にするようなことはしないであろうという常識を利用

し、オセローの警戒心をゆるめさせたまま、オセローに対する彼の陰謀の直接的実行を開始し、オセローに向かって次のように言った。“O, beware, my lord, of jealousy;/ It is the green-eyed monster which doth mock/ The meat

It feeds on: that cuckold lives in bliss/ Who, certain of his fate, loves not his wronger;/ But, O, what damned minutes tells he o'er/ Who dotes, yet doubts, suspects, yet strongly loves !” (III, iii, 165-170) (ああ、閣下、嫉妬にはご用心を。そいつは緑色の眼をした怪獣で、それが餌食とするものを弄んで苦しめますから。女房を寝取られても、おのれの悲運の確証をにぎり、裏切った女に未練を残さぬ男は天国の幸せに生きているようなものです。しかし、かわいくてたまらぬと思う一方でその女を疑い、疑いながらもなお強い愛着が絶てぬとなったら、ああ、これはもう時々刻々が地獄の苦しみです。)

‘jealousy’ (ジェラシー) という英語は通常「嫉妬」と訳されるが、「嫉妬」という日本語はこの劇における訳語としてはかならずしも適切とはいえない。「ジェラシー」の確信的意味は「疑念」(suspicion)である。それは『オセロー』という作品全体の解釈にかかわる基本的認識でなければならない。しかし、この劇が「嫉妬の悲劇」という日本語に置き換えられ、そしてもしこの日本語が男女間の情痴の世界をしめすものであるかのように受け取られる恐れがあるとすれば、そのときは『オセロー』という作品が曲解される恐れが生ずるので、この訳語が危険なものになる。オセローは妻にやきもちを焼いた亭主などというものではない。彼は、信ずることにおいて過ちを犯した男である。

イアゴはオセローに「ジェラシー」に用心せよと言ったが、それに対してオセローが答えた言葉の中に、彼にとって宿命的ともいえる彼の欠陥を見ることができる。“No, Iago; / I'll see before I doubt; when I doubt, prove; / And on the proof, there is no more but this, — / Away at once with love or jealousy !” (III, iii, 189-92) (いや、イアゴ、おれは疑う前にまず見る。疑ったら、証拠を得る。そしてその証拠にもとづいて、することはただ一つだ。ただちに愛を捨てるか、嫉妬を捨てるかだ。) オセローはあらゆる疑念は証拠を得ることによって解決できるものと考えている。しかし、あらゆる疑念に対してそれを解決すべき証拠がかならず得られるとはかぎらないし、あらゆる疑念が証拠によって解決されるともかぎらない。妻の貞操を疑った場合、妻の不貞を立証する積極的証拠を得ることは、あるいは可能であろう。しかし、妻が不貞でないことを立証する積極的な証拠というものは、ほとんど無限なものになって、事実上これを得ることは不可能である。もし、証拠によって妻の貞節を立証しようとするならば、彼女が不貞であるという積極的証拠を得られないということをもって証明は終わったものとしなければならない。妻が貞節であるということを証明する積極的証拠というようなものはこの世に求められないのである。言い換えれば、妻の貞節は、究極的には、夫が信ずることができるものであって、証拠によって積極的に証明されるというものではないのである。

オセローはイアゴの誘導に従ってデズディモウナを観察し、すでに狂わされている彼の眼で行った観察は彼に疑念を抱かせ、彼の疑念は、いくつかのイアゴによる状況証拠を与えられて、デズディモウナは不貞であるという形で信念に変わった。この過程において、オセローは彼の疑念の当否を見極めるために妻に一言も問いただしていない。むろん、その必要はないし、そんなことをしても何の意味もない。妻の貞節は、彼女の不貞の証拠がない時、夫によって信じられることによって成立するものである。オセローは、実は、証拠というものの存在しないところで、信じるか否かという問題に遭遇したのである。

オセローが証拠の信奉者であるということは、彼が少年のころから故郷を去り、常に放浪をつづけ、一か所に定住したことがないという事実に関連がある。彼は、どこにも、彼が本来的に所属した社会を持っていなかった。ヴェニスにおいても彼はむろん外国人であった。ヴェニスは軍人としての彼の技能を買っているだけであって、彼を彼らの社会の内部に迎え入れているわけではない。白人たちの中に入り混じった一人の肌の黒い男という彼の外観は、周囲に対する彼の精神的異邦性と孤立とを象徴するものともいえる。かくして、オセ

ローはヴェニスという一つの共同社会の本来的成員でないためにその社会的エートスを直感的に理解できないから、いちいち検証し、判断や理解のために証拠を必要とするようになる。それが彼の欠陥につながった。

オセローがヴェニスにおいて外国人であるという彼の弱点は、イアゴーにとってはオセローを攻め落とすためにつくべき絶好の局所となるものであり、一切の判断は証拠によると言ったオセローにイアゴーは「わたくしはまだ証拠のことは申しません」と、おそらくは心中でにやりとして答え、すかさずオセローの急所に一撃を加える。“Look to your wife; observe her well with Cassio;I know our country disposition well; / In Venice they do let heaven see the pranks / They dare nat show their husbands; their best conscience / Is not to leave't undone, but kept unknown.” (III, iii, 197-204) (奥さんに注意して、キャシオと一緒にいる様子をしっかり観察してください。.....わたくしは自分の国の人間の気風をよく知っております。そしてヴェニスの女たちは、夫の目には到底見せられないようないたづらを神様の前では平気でしてみせる連中です。彼女たちの最高の道徳は、しないことではなくて、隠し通すことなのです。) 「本当か？」(Dost thou say so?) (III, iii, 205)と問い返すオセローは、半信半疑である。しかし、たとえ半疑におせよ、それが生ずるのは、オセローの信念に外国人に必然的な不安があるからである。オセローは、証拠のないところで信ずることを阻まれている人間であり、証拠にのみ頼る判断を余儀なくされ、そして見せかけの証拠によって裏切られた人間であり、一つの社会から疎外された人間の宿命をたどった。

オセローにとって、彼に対するデズディモウナの貞節は、それによって宇宙の全秩序が成立する支点であった。彼がデズディモウナを愛せなくなるときには宇宙が彼にとっては混沌に帰するのである。“But I do love thee! and when I love thee not, / Chaos is come again.” (III, iii, 91-2) (かわいいやつじゃ! わしがお前をかわいがらんようなことがあったら、そりゃ神による天地創造 以前の混沌の再来じゃ。) オセローが自分の犯した重大なあやまちに気付いたのは、彼が自らの手でデズディモウナの生命をこの世から抹殺した後であった。しかし、デズディモウナを殺さなければならなかった原因はかれにあったのであり、彼女にはなかった。そのことを知ったオセローは生まれてはじめて涙を流したのである。

4. 最終章：再び『ユリシーズ』へ ～ イギリス人のユダヤ人観と現在の「エルサレム」問題

ジェイムズ・ジョイス作の『ユリシーズ』で、マーテロウ・タワーに居候しているイギリス人青年ヘインズがスティーヴン・ディーダラスに話しかける。「僕の国（イギリス）がドイツ系のユダヤ人どもの手に落ちるのを見たくはないよ。これがさしあたって僕たちの国家的な問題なんだけど。」また、スティーヴンが小遣い稼ぎのために勤めている私立小学校の校長でアングロ・アイリッシュ系のミスター・デイジーは言う。「イギリスはユダヤ人共の手に落ちとる。有力な地位はみんな奴らが占めておる。財界も、言論界もな。そして、これは国家衰亡の兆候だよ。彼らが寄り集まれば、かならず国民の精力をしゃぶりつくしてしまうのだからな。この年月、わしは事態のなりゆきを見守ってきた。わがイギリスは死にかけているんだよ。.....死にかけとる.....まだ死んじまいはせんけれどもな。」これらの言葉は、経済面で近代国家に成長した西ヨーロッパ諸国が、その富を守る国家保護主義から、利殖の才に長けたユダヤ人を脅威と感じ、彼らを迫害し、偏見を持つようになったことを示すものである。事実、ユダヤ人は中世以来、金融業にノウハウを持ち、さらに世界各地に離散、移住を繰り返す中で広域なネットワークを形成してゆく。例えば、金融の仕組みを全部作ったユダヤ人のロスチャイルド家は、情報を武器に大きな財を作り上げ、イギリス最大の富豪となった。さらに、後継者たちは、ロンドン、パリ、ウィーン、ナポリに住んで情報網を形成し、また、いくつかの戦争の勝敗の情報をいち早く入手し、ヨーロッパの金融業を牛耳る大財閥に成長していく。

この後つづけてデイジー校長はヨーロッパ人のユダヤ教徒に対するもう一つのより伝統的感情を吐露す

る。「奴ら（ユダヤ人）は光に背きおった。……奴らの眼の中には暗闇がひそんだ。だからこそ、今日まで地上をさ迷い歩いているのだよ。」これは、従来のユダヤ人の宗教に対するキリスト教徒としての偏見にあたる。このデージー校長の二つの発言の間に、日の光が彼の顔にまともにあたる描写がある。「彼はついと離れた。日の光が顔にあたって日の青さがよみがえった。彼はむこうを向き、またこちらを向いた。……幻を追うように大きく見開いた彼の眼が日の光のなかからいかめしく見据えた。」（下線は筆者による）「光に背くユダヤ人」に対し「光に向かうイギリス人」であるデージー校長のこの自負心はさらに次の言葉に表される。「わしはあんた（スティーヴン）よりも幸福ですよ。……わしらはたくさんの過ちやたくさんの罪を犯した。……過ちもたくさん重ねたし、失敗もしたが、この一つの罪だけは犯しとらんのです。わしの老い先も長くはないが、いまだにこうして戦つとる。だが、わしは死ぬまで正義のために戦いますぞ。」（イギリス人が）この一つの罪だけは犯しとらん。」というのは、ユダヤ人のように「キリストの光に背かなかつた。」ということである。そして、この自負心は、デージー校長のいう「わしら（イギリス人）は寛大な国民だが、また、公明正大でもなけりやならんでな。」ということばに敷衍される。今、自分の生きてゆく道しるべとなる魂の父親を求めているスティーヴン青年にとって、分別がましく説教するデージー校長は、その魂の父親たる者の一人であろう。しかし、スティーヴンはデージー校長のこうした言葉や態度に対して一つ一つ心の中で愚弄するか、反抗的な言葉を投げつける。例えば、「イギリス人は寛大で公明正大」という言葉に対し、スティーヴンは、「僕はそういうもったいらしい言葉が怖いんです。……そういうのがぼくたちを不幸な目に会わせるんです。」と反論する。「ぼくたち」というのは、イギリス帝国主義に苦しめられてきた弱小国民であるアイルランド人、ひいてはユダヤ人や黒人たちを指している。

校門を出ようとするスティーヴンを追いかけてきたデージー校長はこんなことを言う。「ちょっと言っておきたいことがあってな。……アイルランドは、名誉なことに、ユダヤ人を迫害せぬ唯一の国になつとるそうだ。知つとるかね？ 知つとらん。では、なぜだかわかるかね？ あいつらを絶対に国の中に入れぬからだよ。」こう言うと、デージー校長はせき込むように笑い続け、スティーヴンに背を向けると、両腕を高く上げて振り動かしながら「奴らを絶対に入れぬからだよ。」と叫び、また笑い続けながら去っていく。その背中にあたる木漏れ日を見て、スティーヴンの心象風景が描出される。「木の葉の格子縞を通して、分別ありげな肩の上に、太陽が金色の斑模様を、踊りはねる銀貨を投げかけた。」デージー校長の言葉には誇張があるとしても、ユダヤ人をアイルランドに入れないイギリスの政策は、アイルランドをイギリスに利益をもたらす、イギリスのためだけの貯蔵庫とするためであった。イギリスのアイルランドに対する輸出入の規制は徹底したもので、リンネル製品をのぞいて、アイルランドの酪農食品、牛肉類等の他国への輸出を徹底して制限し、イギリスだけに利益をもたらす政策がとられた。デージー校長の肩の上に太陽が現出する「踊りはねる銀貨」は、彼によって代表されるイギリス帝国主義、金権主義を愚弄したものである。そして、それは、スティーヴンが会話の最中に垣間見るヘインズやデージー校長の眼の描写と相まって、「公明正大」（眼の青さが象徴する）を自負するイギリス人の内部にひそむどす黒い罪深さを暗示している。— 「暗闇にひそむ眼」（デージー校長がユダヤ人を表したことば）に対し、「海の支配者にふさわしく、海のように冷たい眼（スティーヴンが描写するヘインズの眼）、「日の光に青さがよみがえる眼」あるいは「幻を追うように大きく見開いた眼」（スティーヴンが描くデージー校長の眼）。

ところで、これよりさき、デージー校長はスティーヴンにシェイクスピアの『オセロー』の中でのイアゴの台詞を引用する。— 「金だけは財布にしまっておけ。」（Put but money in thy purse.）『オセロー』の1幕3場、元老院でオセローとデズディモウナの結婚が承認され、かねてデズディモウナに思いを寄せて、イアゴに金を渡して執り成しを頼んでいたロデリーゴは、失望のあまり自殺をはかろうとする。せつかくの金ずるを失いたくないイアゴは、オセローとデズディモウナの間は年齢のへだたりもあり、きっと破綻をきた

すにちがいないと激励しながら、「金だけは財布にしまっておけ。」ということばを30行近くの台詞の中で8回もくりかえすのである。デージー校長は、このことばを作り出したシェイクスピアが、イギリス人として、金の何たるかを知っていた、という。そして、浪費癖があるとにらんでいるステイーヴンに教訓を垂れようとするのである。イギリス人がいちばん自慢していることばは、「わたしは自分の金で暮らしてきた。」(I paid my way.) ということばだ、という。誰にも借りはない、誰にも義理はない、というのである。そして、ステイーヴンに「そういうもったいらしい言葉がぼくたちを不幸な目にあわせるんです。」といわしめた、あの「イギリス国民は寛大な国民だが、また、公明正大でもなけりゃならん。」という発言をするのである。デージー校長は、貯金によって自分の金をいつも財布に入れておき、借金もせず、しかも寛大で公明正大であること、それがイギリス人の誇りだとする。それは、『ヴェニス商人』におけるアントウニオの理念、キリスト教の兄弟盟約的共同体社会内部で通用する理念、誰にも義理はなく、誰からも利息を取らない主義に通ずるものである。しかも、この場面で、デージー校長が、『オセロー』の中で当時のイギリス人観衆の黒人への人種差別を代弁するイアゴの役を演じているのは痛烈な皮肉である。自己資金をあてにして他人に迷惑をかけない主義を美德と唱えながら、他人のふところを自分の利得の肥やしにするイアゴのことばを無意識に披露するデージー校長は、まさにカリカチュアの的となっている。

19世紀後半、それまで迫害され続けていたユダヤ人たちがヨーロッパでシオニズム(Zionism-イギリス、sionisme-フランス)運動を起し始める。シオニズムの「シオン」とは聖地エルサレムのこと。ユダヤ人は紀元前、ここに王国を築いていたが、その後、ローマ帝国によって滅ぼされ、追い出されたユダヤ人は世界中に散らばっていった。ユダヤ人の「自分たちの王国があった場所にユダヤ人の国を再建しよう」という運動がシオニズム運動である。

その後20世紀初頭に、第一次世界大戦(1914-1918)でオスマン帝国が敗れる。『アラビアのロレンス』は第一次大戦中のオスマン帝国からのアラブ独立戦争をえがいた映画だが、この発端はイギリスの三枚舌外交だった。(下線は筆者による)

イギリスは協定でアラブの独立を約束しながら、一方でフランス、ロシアと別の協定を結ぶ(1916年)。これはオスマン帝国が崩壊したら、この領地をイギリスとフランスとロシアで分割しようというものであった。一方、イギリスの外務大臣が、イギリスのユダヤ人コミュニティのリーダーに、オスマン帝国が崩壊したら、パレスチナにユダヤ人のための「ナショナルホーム」をつくることを認める、という約束をする。これは裕福なユダヤ人から戦争のための資金を調達したいからであった。アラブ人には、アラブの国をつくると言い、ユダヤ人にはユダヤの国をつくるという。しかしイギリスとフランス、またロシアとで分割しようという密約もしていた。これがイギリスの「三枚舌外交」である。(以上、池上彰著『池上彰の世界の見方』、小学館刊より)(下線は筆者による)

アメリカのトランプ大統領が、2017年12月6日、「エルサレムはイスラエルの首都だ、アメリカ大使館をテルアビブからエルサレムに移す」と宣言したことから世界に大きな波紋が広がっている。1947年、国連のパレスチナ分割決議で、パレスチナの土地がユダヤ国家とアラブ国家に分割された。そしてエルサレムは国連による永久信託統治とすることとなった。そして、国連の分割決議に基づいて建国されたイスラエルの首都はテルアビブとなっており、国際的に大使館はその国の首都に置くことになっている。したがって、アメリカ大使館も日本大使館もすべてテルアビブにある。

トランプ大統領のアメリカにおける自己の最大票田でアメリカ人口の三分の一を占めるキリスト教福音主義派が、「イスラエルの首都をエルサレムとする」というトランプ宣言を後押ししているという。ペンス副大統領は福音主義派であり、大統領の娘と娘婿はユダヤ教徒である。こうしたことが大統領宣言の背景にあるのであろうか？

聖地エルサレムをめぐることは、昔から戦いが続いたが、その主な原因はエルサレムが東西文化が交わる場所として交通の要衝であり、文明の十字路だから「交易」が盛んで富を生む土地だからである。戦争は、この「土地」や「資源」に宗教や民族がからむと火に油を注ぐことになる。「アメリカ第一主義」を掲げ、大財閥であるトランプ大統領が自国の利殖を図っているのではないかという憶測が生まれても不思議ではない。

。